

ボクはカルデアで生き
残りたい。

Linoka

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

マッシュに妹がいたらというのを想定しただけです。宝具も何もかも二人で使うようにしてみました。

目次

プロローグ	1
プロローグ 2	14
オルレアン 1	25
オルレアン 2	37

プロローグ

転生、という言葉がある。

死んで別の世界で生まれ変わる、という事だ。

ボクはその転生者だ。学校から帰ってる最中で車に跳ねられて死亡し、気が付いたらカルデアにいた。最初はなんだかよく分からなかったが、どうやらデミ・サーヴァントの被験体として選ばれたようだ。

他にもう一人被験体はいて、そいつはマシユ・キリエライトという女の子だ。なんかボクの双子の姉らしい。最初は戸惑ったが、でも姉らしいので、とりあえず生まれ変わってからずっと姉として慕って来た。

で、魔術師としてとりあえず優秀な人材は今日から、初のレイシフト実験だ。そんなわけで、ボクはとりあえず一人で部屋でのんびりしている。

すると、ウインッと部屋の扉が開いた。

「おかえりー」

「ただいま、マロ」

入って来たのは姉のマシユだ。双子なんだから当然だけど、ボクの外見はそっくり

だ。…………胸以外は。なんでボクの胸囲は成長しないんだろうなあ。前世でも成長しなかったのに…………。

マシユはベッドでゴロゴロしてるボクの隣に座って、ペットボトルを差し出した。

「どうぞ。こ注文のコーラです」

「ありがとう」

さつき、じゃんけんで負けた方が飲み物を買って来るっていうゲームしてた。

買って来てもらった飲み物をもらい、一口飲んだ。すると、ふわつとふかふかした生き物がボクの肩に乗った。

「あ、フオウさん。いらっしやったのですね」

「前々から思ってたけど、フオウさんって事は2と1はあるの?」

「……………はい?」

「なんでもない」

「……………マロはたまにわけのわからないことを言いますね」

というより、ギャグが周りに伝わりにくいだけです。前生きてた世界でもこんな事あったわ。

フオウがボクの頬を舐めてきた。ペットボトルのキャップにコーラを注いで、フオウの口元に差し出した。

「はい」

「フオウ！」

ペロペロとコーラを飲み始めた。ほんと可愛いなこの生き物。

「本当にフオウさんはコーラが好きなんですネ」

「フオウ」

「これ、動物が飲んでも平気なのかね」

「フオウ!!?」

「さあ?でも大丈夫でしょう、多分」

「フオウ!フオウ!」

「……………フオウさんが何かを訴えています」

「いや俺からあげた覚えはないし」

そんな話をしてる時だ。ピクツとフオウが首を上げた。で、「フオウ」と鳴くと部屋を出て行った。

「ちよつ、フオウ?」

「何かあったのでしょうか……………」

「追ってみる?」

「うん」

姉妹仲良く手を繋いで歩き始めた。とりあえずマシユの後ろに続いて歩いてると、途中で人が倒れてるのが見えた。赤い髪の女の子だ。

「……………え、事件？」

「何かあったのでしょうか」

「ダイイングメツセージとかないかな」

「縁起でもないこと言わないで下さい」

そんな話をしてると、フオウが倒れてる女の人の頬をペロツと舐めた。

女の人は目を覚ましたようで身体を起こした。

「……………今、頬を舐められたような……………」

あ、起きた。すると、マシユは隣に膝をついて女の人に声をかけた。

「……………あの、朝でも夜でもありませんから起きてください。先輩」

出た、謎の先輩呼び。ボクも最初会ったときは先輩呼びされたわ。まあ、妹だからって事でやめてもらったけど。

「……………」

女の人はボヤけた顔でマシユを見上げていた。

「はい。それは簡単な質問です。たいへん助かります。ここは正面ゲートから中央管制室に向かう通路です。より大雑把に言うと、カルデア正面ゲート前、です」

カルデア正面ゲートっていうと……ああ、この人もしかして最初のアレに引っかけたのか。

「アレでしょ、おねーさん入館する時のシミュレートを受けたんだ。霊子ダイブは慣れてないと脳に来るからね」

「……………あれ？同じ人が、二人？」

「あ、ボクはこっちの双子の妹なんだ」

「へえ、双子さんなんだ」

「初めまして、先輩。私はマシユ・キリエライトです」

「ボクはマロ・キリエライト」

「……………マシユマロ？」

「違います」

言うと思ったよ。ボク達の母さん絶対ふざけてるよね。会ったことないからいるのかどうか知らんが。

「ああ、そこにいたのかマシユマロ姉妹」

後ろから声が聞こえた。振り向くと、レフ・ライノールがニコニコと微笑みながら立っていた。

「ダメだぞ。断りもなしに移動するなんて……………おっと、先客がいたんだな」

「マシユマロ姉妹はやめて下さい、レフ教授」

いや本当にやめて。マシユはマシユマロかもしれないけど、ボクのはマシユマロにもならないから。

が、ボクとマシユの抗議をまるで無視して、レフ教授は自己紹介した。

「私はレフ・ライノール。ここで働かせてもらっている技師の一人だ。君の名前は？」

「あ、はい。私は藤丸立花と言います」

「藤丸さん、か。召集された48人の適正者の最後の一人というわけか」

ふーん、この人が？マヌケな顔してるなー。

「じき、所長の説明会が始まる。君も急いで出席しなさい」

「説明会………?」

「そうだ。ようは組織のボスから浮ついた新人たちへのはじめの躡って奴さ。所長は些細なミスでも許容できないタイプだからね、ここで遅刻でもしたら一年は睨まれるぞ」

「説明会まであと5分か……。ボク達が案内するよ。行こうマシユ、立花」

「はい」

「うん」

とりあえず走り始めた。

説明会で、立花が全力の平手打ちを喰らい医務室に運ばれた。その間にボクとマシユはレイシフトの準備だ。

隣のマシユはAチームの中でも首席で超優等生、それに引き換え、ボクはそこまで成績は良くなかった。いや、それどころか下から数えた方が早い。

だから、マシユと同じチームでぶつちやけ超助かる。その分、ボクは楽出来るから。

「いよいよですね、マロ」

「そうだね。早く終わらせて家で寝たい」

「まったく……。最近、ダラけ過ぎですよ」

「良いんだよ、仕事中はハキハキしてるし」

「そういう問題では……。まあ良いです、もう」

そういえば、マシユは随分と立花という女の子の気に入ってたなあ。ハッキリと先輩、と呼んだのはボクの次に初めてじゃないだろうか。それに、ボクも今や先輩とは呼ばれなくなった。いや、ボクの方から呼ぶなって言ったんだけどね。

「ねえ、マシユ」

「? なんですか?」

「立花のこと気に入ったの？」

「はい。………なんといいですか、かなり人間らしい方？でしたので」

「そうなの？」

あんま人を見る目とかなないからそういうのわからないんだよな。

「まあ、それならこれ終わった後で話しかけてみりや良いよ。良い人そうなら、多分友達になつてくれるさ」

「そうですね。その時は、一緒にマロも来てくれますか？」

「良いよ」

まあ、ボクも友達が出来るのは嬉しいしね。何となく、ボクとマシユは周りから浮いてるし。

そんなことを考えてる時だ。爆発音が聞こえた。そして、それと共に爆風が管制室を襲った。

「！ マシユー！」

「えっ………？」

慌ててマシユの腕を引っ張り、庇うように抱き締めて覆い被さった。直後、ズシンと背中に大きな衝撃が響いた。それと共に、ズボツとお腹の方で何かを貫く音が聞こえた。

「ケホツ、ケホツ……い、一体、何が……！」

マシユが咳き込みながら眩いた。その真上で、ボクも大きく咳き込んだ。直後、ビチャビチャつと口から血が吐き出され、それがマシユの顔の真横に落ちた。いや、飛沫が少しだけ頬に飛んでいる。

「ま、マロ………？」

「………ま、しゆ………」

ああ、さっきの後は何かと思つたらあれか。何かボクの背中を貫いてるんだ。だから今、血を吐いた。

「マロ!? だ、大丈夫ですか!?!」

「………だいじょうぶに、みえるのかよ………？」

すごく痛いし苦しい。これなんでボク生きてるんだろうか。身体を物が貫通するのってこんなに苦痛なものなんだな。これは死ぬし、何なら早く楽になりたいとすら思ってしまう。

だけど、目の前のマシユはそんなボクを見てとても辛そうな顔をしていた。目尻には涙なんか浮かべているしね。そんなマシユの姿を見ると、意地でも死にたくなくなる。

すると、ウインつと扉の開く音がした。誰かが入ってきたのか?と思うと共に、出口は無事である事を察した。

「……マシユ、逃げて……。ボクはどの道助からない……」

「なっ、何をバカなことを言ってるんですか！そんな事出来るわけがありません！」

「……………いいから。ボクは、もう死ぬ……。さつき、入口の開く音が聞こえた。……ケ
ホツ、ケホツ！……まだ、出入り口は作動してるって事だよ。……そこから、逃げら
れる……………」

「つ……………で、ですが……………！姉として妹を置いて逃げるわけにはいきません！」

「マシユ……………！」

ていうか、瓦礫を支えてる状態もそろそろキツくなってきたし……………！他に生存者はい
ないのか？その人にマシユを連れてってもらおうか……………！

「マシユマロ……………？」

声が聞こえ、振り返ると立花が立っていた。相変わらずの呼び方だったが、今は気に
してる余裕はない。それよりもマシユを連れて行く事を頼む事が先だ。

「立花、ちょうど良かった……………！ボクの下、から……………マシユを連れ出し」

「先輩！マロを助けて下さい！」

「分かった！」

えっ、そ、それはどっちの「分かった」なの……………？

不安は的中し、立花はマシユをボクの下から引き摺り出すと、ボクの上の瓦礫を退か

し始めた。

「なっ、何してんの……………?」

「決まってるじゃん、助かるんだよ。マシユ、手伝って!」

「は、はい!」

「こいつら話聞いてた?」

「ボクの事は、良いから!……………多分、脾臓のあたりに鉄骨が突き刺さってるんだよ!ボクを置いて先に」

「マシユ、せーので行くよ」

「はい」

「せーのっ!」

「いや、聞けよ話!」

なんで助けようとするんだよ!ボクはもう助からないのは見れば分かるだろ!ボクなんかのために……………!

二人が力を入れて瓦礫をどかさうとした直後だ。機械音声が鳴り響き始めた。

『システム、レイシフト最終段階に移行します。座標、西暦2004年。1月30日、日本、冬木市』

! このままレイシフトするつもりか?明らかに異常事態だ。

さらに、異常事態は続いた。カルデアスが真っ赤に輝き出し、機械音声が再び声を発した。

『観測スタツフに警告。カルデアスの状態が変化しました。シバによる近未来観測データを観測します。近未来百年までの地球において、人類の痕跡は発見できません』

なんだって？ どういう意味だ？

『人類の生存は確認できません。人類の未来は保証できません』

どういふことだ？ 何が起ころうとしてる？ 何も分からないまま、プシューツと扉の閉まる音がした。

『中央隔壁、封鎖します。館内洗浄開始まであと180秒です』

「！ と、扉が……………」

だから逃げろって言ったのに……………！

奥歯を噛み締めてると、マシユがボクの手を握るのを感じた。反対側の手は、立花が握っている。こんな時に何やってんだ？ と、思ったが、とてもその手が暖かいような気がした。

「……………二人とも？」

「大丈夫です、マロ」

「うん。もう、逃げられなくなっちゃったから」

「い、いやつ……それ、全然大丈夫じゃない」

「3人とも、これで一緒です」

いや、こんな事で一緒とか言われても……！だが、封鎖された以上は確かに諦めるしかない。まったくバカな姉と友達だ。いや、さつき出会ったばかりで友達ですらないかもしれない。ボクなんかを助けて、一緒に心中なんてバカげてる。心底呆れる。

……でも、死ぬ時まで一緒にいてくれるのは、少し嬉しかった。前に死んだ時は、たった一人で勝手に事故ったから。これから死ぬというのに、変に穏やかな気分だった。前の時とは違って。死ぬことに慣れたのかな。

すると、さらに機械音声が何か喋り始めたが、ボクはもう気に留めなかった。

『適応番号48、藤丸立花をマスターとして再設定します。アンサモンプログラムをスタート。霊子変換を開始します』

直後、ボク達は揃って意識を失った。

プロローグ2

気が付くと、冬木市に立っていた。

なんだ？意識が朦朧とする。なのに、体調も精神面も万全だ。これまでになかった程にだ。ピンピンしている。さつきはお腹に穴が空いていたはずなのに。

……そういえば、意識が落ちる前に何かと夢の中で話していた気がする。お腹が痛くてよく覚えてないけど、なんか力を貸すだとか何とか……。まあ、それどころじゃなかったから、うんうんと生返事を続けてたけど。

そう思って、自分の服装を確認してみると、なんか真つ黒なタイツみたいな服に身を包んでいた。さらに、左手には半分に分かれた黒い盾のようなものが握られている。あれ、ボク着替えなんてしたっけ……。？てか何これ？盾？

「マロ………？」

震えたような声が聞こえた。ふとそつちを見ると、同じように全身タイツっぽい服で、右手に半分に分かれた盾を持つてるマシユが涙目でボクを見ていた。

が、やがてぶくーっと頬を膨らませ、顔を赤く染めて睨み始めた。

「えっ、何」

「マロー！バカ！」

「なんで？？」

ズケズケとボクの方に歩いて来て、胸ぐらを掴んで来た。

「もうっ！私なんかを庇って……………しかも『ボクはどの道助からない……………！』だなんて……………私がマロを見捨てられるわけがないでしょう？？」

「ご、ごめんね……………でもほら、どうせボク死ぬんだし、ボク的にはマシユには生きて欲しかったなーなんて……………」

「あなたの事情なんて知りません！あなたは、あなたは残された者の気持ちを考えたことがないのですか？？」

「っ……………」

そう言われると胸が痛い。いや、でも実際今、ボクが生きること自体が奇跡なんだし、これから命を落とす最後の願いとしては逃げて欲しかったんだけど……………。

まあ、マシユは怒ると面倒臭いし、言ってることも間違っではないので謝っておこう。

「……………ごめんね」

「……………いえ。でも、良かったです。生きていてくれて」

「それなんだけどさ」

夢の中での話をしようとした時だ。周りの炎からゆらりと人影が見えた。

「！ マシユ」

「は、はい……………」

現れたのはスケルトンだ。マシユを庇うように盾を構えつつ立った。どうする？ 喧嘩は苦手ではないが、相手は未知のモンスターだ。せめてマシユだけでも逃してやりた
いが……………。

若干、焦りながら盾を構えてスケルトンから目を離さないしていると、マシユが「あつ」と声を漏らした。

「どうしたの？」

「私の足元に、先輩が……………」

「はっ？」

ふと下を見ると、立花がその場で寝転んでいた。気絶してるのか、スヤスヤと寝息を立てている。

「マシユ、立花を起こしてあげて。ボクが奴らを食い止めてる間に」

「！ またあなたはそうやって……………」

「いやいや、今にもあいつら襲いかかって来そうだから。そうするのがベストでしょ」

「……………わかりました」

よし、上出来。アメコミヒーローにハマってるボクは、特にキャップのファンだから

身体は鍛えてある。とはいえ、生身の身体だ。どこまで戦えるかは定かではない。ここは立花を起こし次第、さっさと撤退するのが得策だろう。

スケルトンは片手に握る剣を振り上げてボクに向かって来た。ボクも後ろの二人を巻き込まないようにスケルトンと距離を詰めた。スケルトンは正面から剣を振り下ろし、それを反射的に横に回避した。なんだ？ 敵の動きがよく見える。あの速さの攻撃を、余裕をもって回避出来る。

振り下ろした剣を、さらに斜めに振り上げた。盾を頭上に構えながら、腰を低い位置にしてなるべく体制を崩さずに回避。すると今度は振り上げた剣をそのまま振り下ろしてきて、それも避けた。

……なるほど、剣を振ることしか能がないのか。どういうわけか知らないが相手の攻撃はボクによく見えているし、これなら逃げるどころか全滅させられるかもしれない。

「っ」

振り上げてきた剣を、左手の盾で押さえつけるようにガードし、右手でスケルトンのボディにアッパーを叩き込んだ。バギバギッと骨が折れる音が鳴り響き、スケルトンは後ろに殴り飛ばされた。

「……………」

あれ、ボクこんなに力強かったっけ？少し怯ませるだけのつもりだったんだけど……。

自分で何をしたのかわからずにボンヤリと拳を眺めていると、後ろから声が聞こえた。

「マロ、後ろ！」

「へっ？うおっ？？」

2体目のスケルトンがいつの間にか背後を取って剣を振り抜いてきた。ボクは慌てて盾を振り回して剣をガードした。

「くっ……………！」

危なかった。あと1秒遅かったらやられてた。スケルトンの猛攻を盾で防いでると、スケルトンの後ろからバギツと音がした。直後、ズルリと粉々になって倒れるスケルトン。マシユが盾で押し潰していた。

「ふう……………ありがと、マシユ。助かったよ」

「いえ」

「立花は？無事？」

「はい、この通り」

さつきまで寝てたくせに、えらいピンピンした様子の立花が歩いてきた。

「で、なんだったの？てか二人のその格好は？」

「ああ、それボクも気になってた」

「えっ、マロ把握してないの？」

「お腹に鉄骨刺さってて痛くてそれどころじゃなかったんだよ。気が付いたらここにいて服装変わってた」

「なんか、こう……ボデイラインが強調される服で少し恥ずかしいんだけど。双子のマシユも同じ格好だから尚更。」

さりげなく盾で身体を隠しながら話を進めた。

「マシユ、なんか知らない？」

「あ、はい。それなんですけど……」

マシユが説明しようとした時だ。何処からか声が聞こえてきた。

『ああ、やっと繋がった！もしもし、こちらカルデア管制室だ。聞こえるかい!!?』

あ、ボクと同じで所長から嫌われてるドクターの声だ。

「あ、はい。聞こえるよ」

「こちらAチームメンバー、マシユ・キリエライトです。現在、特異点Fに到着しました。同伴者はマロ・キリエライト、藤丸立花の2名、心身共に問題ありません」

『マシユマロ姉妹!!?というよりマシユ！なんだい、その格好は!!?ハレンチ過ぎる！』

僕はそんな子に育てた覚えはないぞ!?!?』

「おい、なんでボクは区切った」

「……これは変身したのです。カルデアの制服では先輩とマロを守れそうになかったの
で」

は？変身？仮面ライダー的な？

『変身？変身って、何を言ってるんだ？頭でも打ったのか？それとも、やっぱりさっきの
で……』

ボクと同じ感想を持ったドクターだった。どうでも良いけど、お前後でボクを区切つ
た件は問い詰めるからな。

その言葉に答えるように、マシユは冷たい声で返した。

「Dr. ロマン、ちょっと黙って。私とマロの状態をチェックして下さい。それで状況
は理解していただけたと思います」

『君達の状態を……?お……お……お、お……?身体能力、魔力回路、全てが向上
している!これじゃ人間というよりも……!』

「はい、サーヴァントそのものです。先ほど、マロが敵性モンスターと戦闘した結果、拳
一撃で敵を戦闘不能にしました。経緯は覚えていませんが、サーヴァントと融合した事
で一命を取り留めたようです」

ふむ、それでボクのお腹の穴は……。

「今回、特異点Fの調査、解決のためにカルデアでは事前にサーヴァントが用意されてきました。そのサーヴァントは私に契約を持ちかけて来ました。英霊としての宝具と能力を譲り渡すに代わり、この特異点の原因を排除して欲しい、と」

なるほど、なんか臆げな記憶にあつたのはそれか。でも、疑問も残る。ボクとマシユの手に持つてる宝具、おそらく盾はピツタリ半分に分かれている。

もしかして、ボクとマシユに英霊は二つに分かれた、ということか？

『そうか。で、君達の中に英霊の意識はあるのか？』

「いえ、私達に戦闘能力を託して消滅しました。最後まで真名を告げずに……。マロは聞きませんでしたか？」

「ボクはお腹痛くてそれどころじゃなかったから」

「そう、ですか……」

『まあ、不幸中の幸いだな。召喚したサーヴァントが協力的とは限らないからね。それに、二人がサーヴァントになってくれたのなら話は早い。全面的に協力できる』

まあね。さつきボク、敵を殴り殺したし。……あ、そういえばさつきの奴、剣持ってたよな……。

ドクターと立花とマシユが何か話してる間に、殴り飛ばしたスケルトンの方へ歩い

た。骨は粉々になっているが、剣は無事だ。よし、こいつを借りよう。納める鞘が見当たらないが、贅沢は言えない。

「マロ、行きましょう」

「あ、もう方針決まったの？」

「はい。こちら、先輩が私達のマスターとなり、霊力の高いポイントに移動することになりました」

「よろしくね、マロ」

「あ、うん。よろしくね、立花」

武器も調達したし、問題はないだろう。あ、いや一つだけ確認したいことがあった。

「その前にマシユ、一つ良い？」

「? なんですか？」

「マシユのその盾とボクの盾ってさ……」

「……はい。おそらく、同じものです」

「だよね」

「こう言う時、何となく、こう……試してみたくなるよね。」

「くっ付けてみようよ」

「マロ……。今はそんな事をしてる場合は」

「いやいや、性能チェックのついでにさ。もしかしたら、何か変化あるかもしれないし」
「……マスター？」

「いいんじゃない？こんな時だし、気楽にいこうよ」

「……まあ、マスターがそう仰るなら」

そんなわけで、盾を断面に合わせてくつつけてみた。直後、バツンと音がした。何かと思つて盾を見ると、くつついている。プラモデルのように接合されたのではなく、完全に一つになった。

「おお……おおお？」

「くつ、付いた………？」

すごい。でもこれどうやって離すんだ？と、思つたらグリップの部分にボタンがあった。それを押すとなんか離れた。

ふむ、つまり一つにしたら二つにしたり出来るわけか……。

「おおー、結構便利じゃない？」

「そうですね。まあ、戦闘の役に立てば良いのですが……」

「そこはボクらの頭次第でしょ。もしくは立……マスターの頭次第だね」

「うっ、プレッシャーかかるような事を……！」

「冗談だよ。さ、行こう」

そういうわけで、ドクターに言われたポイントまで歩き始めた。

オルレアン1

アレから、ボク達は冬木市で奮闘し、現地のキャスターの助けもあつて何とか聖杯を回収して戻って来れた。が、その分失ったものは多かった。レフ・ライノールが敵だったり、オルガマリー所長が亡くなったりと、中々にハードな任務だった。

その結果、これからは7つの時代にレイシフトし、聖杯を回収して特異点の修復をすることになった。

で、今はその一つ目の特異点についてのブリーフィング中である。

「と、言うわけで、特異点の調査及び修復、そして聖杯の回収。これらが今回の作戦の目的だ。良いね？」

ドクターの確認に、ボクもマシユも立花……マスターも頷いた。

その返事に満足そうに頷くと、ドクターは続けて説明を始めた。

「さて、それからもう一つ。これから特異点を修復するわけだけど、おそらく戦闘は避けられない。だから、今から一体、サーヴァントを召喚しておこうと思うんだ」

ふむ、なるほど。戦力の補充か。それは確かに良いかもしれない。

「分かった」

「じゃ、レオナルド。後は頼むよ」

そう言われて現れたのは、レオナルド・ダ・ヴィンチ。我らがカルデア技術士のトップでサーヴァントだ。

「よし、私に任せたまえ。では行こうか、藤丸立花ちゃん」

「えっ、ど、どこへ？」

「召喚をしにだよ。マシユマロ姉妹も来るだろう？」

「はい」

「いや、だから略すなって」

ダ・ヴィンチちゃんに連れられ、召喚しに行つた。やり方を教わり、最初の召喚。正直、ちよつと楽しみだ。だって最初の英霊だもの。どんな人が出てくるのか気になるじゃない？

キイイインと音を立ててサークルが回り始め、英霊が姿を現した。

やつほー！ボクの名前はアストルフォークラスはライダー！それからそれから……ええと、よろしく！」

髪がピンク色の人が出て来た。その子はマスター、マシユ、ボクを見比べた後、キョトンと首を傾げた。

「えっと、どの子がマスター？」

「私だよ。私は藤丸立花、よろしくね」

「あ、君か。ごめんごめん。サーヴァントの反応あるのにみんな普通の格好だから戸惑っちゃったよ」

ああ、なるほど。確かにマシユもボクも普通の格好だ。

召喚はこれで終わりだ。ダ・ヴィンチちゃんが小さく手を叩いた。

「へえ、アストルフオか。確か、シャルルマーニュ十二勇士だったね」

「君もサーヴァント？」

「私はレオナルド・ダ・ヴィンチ。カルデアの技術士をしている。気軽にダ・ヴィンチちゃんと呼んでくれ」

「分かった」

おお、この軽いノリのダ・ヴィンチちゃんに動じない……。随分と自由な子なんだな、アストルフオ。

「私はマシユ・キリエライト、こちらのマロ・キリエライトと同一のデミ・サーヴァントです」

「へえ、二人で一つって事？」

そういう事になる。宝具を使うにも、盾を合体させないと使えないし。

「面白いねー。ね、宝具とか見せてよ。どんななの？」

ボクの方に歩み寄って来て、顔を近づけて来た。い、いきなり距離近いな……。いや、まあ良いんだけどさ。

そのアストルフオに、マスターが声をかけた。

「待つて、アストルフオ。今は時間が無いんだ。早くレイシフトしなくちゃいけないから、それはまた後で良いかな？」

「えー、良いじゃん別に。少し見るくらい」

くつ、やはり自由なタイプか。マスターの言うことを聞かないとは。まあ、こういう子供っぽい人はボクの領分だ。

「レイシフトしたら見せてあげるから。それで良い？それまで待つてない？」

「んー、まあ良いや。じゃあ、さっさとレイシフトしちやおう」

待つてない、と「そんなことも出来ないの？」みたいな煽るような聞き方をすれば子供は言うことを聞く。まあ、教育にはあまり良くなさそうだが。

そんなわけで、三人に一人追加され、四人で管制室に戻ると、ドクターが声をかけて来た。

「あ、戻って来たね」

「マスター、この人は？」

「ドクターロマン、今のカルデアの司令代理みたいな人だよ」

「みたいな人って……まあ良いや。じゃあレイシフトしようか」

ドクターの一言で、全員で準備を始めた。レイシフト直前、ドクターが思い出したように言った。

「あ、そうそう。藤丸立花ちゃん。レイシフトした後、一つだけ頼まれてくれないかな？」

「? 何?」

「霊脈を探し出し、召喚サークルを作って欲しいんだ」

「何それ」

「難しいことじゃ無いよ。霊脈を探し出してくれれば良いから。それで、こちらから補給物資を送ったり、現地で自由に召喚も出来るようになるからね」

ああ、冬木でやってたアレか。

「分かった」

マスターが頷くと「よしっ」とドクターは満足そうに頷いてレイシフトを開始した。

気が付くと、広い草原の上に立っていた。さっさと変身を済ませたボクは、相変わらず半分に分かれてる盾を手にしていた。

「おおー、なんか懐かしい感じがする……」

アストルフオが声を漏らした。で、ふとボクの盾を見た。直後、「おお……？」と困惑したような表情を浮かべた。

「……なんで割れてるの？」

「だからマシユと二人で一つなんだってば」

言うのと、アストルフオはマシユの盾に目を向けた。

「あ……二人で一つってそういう……。君達もしかしてライダー？」

「いやいや、違うから。それより、さっさと仕事を済ませよう」

言いながら、ボクは腰のホルスターのピストルを抜いてリロードした。カルデアにあった余ってた奴だ。あまり銃の種類には詳しく無いからどんな銃なのか知らないけど。

そんなボクを見て、マシユが眉をひそめて言った。

「マロ……。そんなもの持って来たのですか？」

「前の冬木の時は武器が無くて、攻撃はほとんどキャスターメインになってたでしょ。攻撃力を少しでも上げるためにくすねてきた」

「くすねるのはダメです。後でちゃんと許可を取るように」

『いや、まあ間違った判断じゃないから構わないよ』

空からドクターの声が聞こえた。今回も通信はあるようだ。

『聞こえる？みんな』

「ああ、聞こえるよ」

『良かった。時代は平気？』

「問題ありません。1431年、百年戦争の真ただ中ですね。ただ、現在は休止中のはずですが」

『よし、じゃあまずは霊脈を探してくれ』

言われて、ボク達は早速行動を開始した。まあ、何にしてもまずは街を探すことだ。

四人で、とりあえず建物が見えないか辺りを見回しながら歩いた。すると、何人か人が歩いてるのが見えた。

「あ、誰かいるよ」

「ホントだ」

アストルフオに合わせて、ボクも相槌を打った。フランスの斥候部隊か？

「マスター、どうしますか？接触してみますか？」

「うーん……そうだね。話してみないことには何も分からないし」

「じゃあ、ボクが行ってくるよ！」

「あ、アストルフオさん！」

あ、これはダメなパターンだ、と思う間も無く、アストルフオは元気良く斥候部隊の人に声を掛けた。

「おーい、ちよつと聞きたいことがあるんだけどさ……」

「……………」

「……あれ？もしもーし、聞いてる？」

「ひつ、敵襲！敵襲ー！」

「なんで?!？」

いやもう少し距離感とかあるでしょ……。せめて腰の剣は隠して行けよ……。

呆れてる間にも、気がつけば周りを取り囲まれていた。

「あれー？ボク何かしちやった？」

「説教は後でするからな！マスター、指示を！」

「分かった。とにかく、流血沙汰はマズイからみんな、特にアストルフオは峰打ちで！マロも拳銃はしまつて！」

「これはピストルだよ？」

「どつちでも良いから！マシユは私の防衛、アストルフオとマロで迎撃！」

その指示に従い、ボクとアストルフオは正反対の方向に走り出した。兵士の一人の剣撃をしゃがんで躲すと、両足を払って浮かせて、その脚を掴んで別の兵士に叩きつけた。今度は背後から斬り掛かって来たので、姿勢を低く屈めて盾で突撃し、体当たりで吹っ飛ばした。

「グッ……!?」

すると、ボクの横を抜けて兵士が三人、マシユの方へ向かった。そのうちの一人に足を掛けて転ばせて止めたが、残り二人は剣を構えてマスターに襲い掛かった。

「マシユー！」

ボクの盾を投げてマシユに手渡すと、マシユはそれを受け取りマスターの前に立ち、盾で二人からの攻撃をガードした。

「マスター、私の影にしゃがんで隠れて下さい！」

マシユはそう言うと、しゃがみながら両方の盾を合体させた。それによつて体勢が崩れ、両サイドに転んだ兵士を盾を分離させてマシユは殴り飛ばした。

「！ マロー！」

その様子を見てると、マシユがボクに向かって盾を投げ付けた。行動の意図を察したボクはしゃがんで回避、盾は頭上を通り過ぎ、後ろの兵士に直撃した。

その隙に跳ね返った盾を手に取りながら軽くジャンプし、空中で半回転しながら回し

蹴りを顔面に放った。

「ふう」

着地しながら一息つくくと、一人の兵士が声を張り上げた。

「撤退、撤退――！」

それによつて、倒れていた兵士達も逃げ始めた。そのうちの一人を捕まえて、ボクは馬乗りになった。

「待った」

「うぐつ……!!? な、なんだよ!!? 殺すなら一思いに……！」

「いや、違くて。殺さないから落ち着いて」

「嘘つけ！あんなに派手に大暴れして……！」

「派手に大暴れしたのに誰も死んでないでしょ」

「……………」

そう言ううと少し落ち着いたようで、呼吸を整えた。やがて、アストルフオやマシユ、マスターが駆け寄って来た。

「どうしたの？マロ」

「一人捕まえたから。とりあえず今どうなってるか聞こうよ」

「なるほど」

「あの、それより降りてくれないか？その、お尻の感触が直に来て、その……」
「……………」

何か硬いものがボクの股下に当たっていた。……………なるほど、そういうね。恥ずかしさで顔を真っ赤にして、ボクは拳を顔面に振り下ろした。

十十十

何とかマシユとマスターが誤解を解いて、フランス軍の砦に向かった。

兵士の後続き、ボクは未だに赤くなつた顔を両手で隠しながら歩き、アストルフォが慰めてくれていた。

「ま、まあまあ、マロは良くやったよ」

「……………まるで逆レイプしてるような構図……。マシユの前で痴女みたいなことを……。死にたい……………」

「いやいや、逃さないためにはある意味では正しい行動だったと思うよ」

「服越しとはいえ、男性器を初めて触ってしまった……。しかも、股関節の辺りで……………」

「落ち着いてつてば。仕方ないよ、さっきのは」

「……変に硬くて温かかった」

「感想はいいから……」

そんな風にしよげてる時だ。ドクターの声が響いた。

『！魔力反応があるぞ、注意しろみんな！』

言われてそつちを見ると、竜牙兵の大群が砦に向かって来ていた。

オルレアン2

竜牙兵の群れが襲い掛かってきた。それを見るなり、マスターは早速ボク達に指示を飛ばした。

「マシユは私と一定の距離を保って戦闘開始、マロとアストルフオは兵士の皆さんを守りながら迎撃！」

その指示に全員が返事をした。中々に妥当な判断だ。戦闘に関してはどちらかという臆病なマシユを自分の近くに配置し、比較的戦闘への恐怖が薄いボクや、英霊であるアストルフオを自由に戦わせるのは良いと思う。

それに追加して、兵士達を庇いながら、というのも悪くない。これから先、情報を得るのにこの兵士達からの情報は有益なものになるだろうし。

「よし、やろうか」

今回は手加減無しだ。ポッコボコにして追い返してやる。竜牙兵の群れに向かって、盾を構えながらホルスターから拳銃を抜いた。

3と4発ほど狙撃したが、少し怯んだ程度で撃破には至っていない。だが、それで良

い。隙を作るには十分だ。すぐに接近して、盾で殴り飛ばし、倒れた竜牙兵を上から盾で叩き潰した。

ふと顔を上げると、兵士達が竜牙兵に襲われているのが見えた。そつちに向かつてたき壊した竜牙兵の剣を拾って投げつけた。

投擲で竜牙兵をぶっ飛ばすと、好機と見た兵士は反撃し、何とか助かった。

直後、後ろからガギツと音がした。振り向くと、ボクの真後ろでマシユが竜牙兵を破壊していた。その後ろにはマスターも控えている。

「背中がガラ空きです、マロ」

「ゾ、ごめんね」

「お礼は後です。片付けましょう」

「りよ」

そんなわけで、周りの竜牙兵達を見回した。二人でマスターを挟んで、半分の盾を構える。

一匹の竜牙兵が剣を振り上げて襲いかかって来た。その剣を盾で受け止め、拳でボディを殴って退がらせた後に、縦の下の部分で顔面をブチ抜いた。

すると、後ろからマスターがボクの肩を叩いた。横から別の竜牙兵が襲いかかって来ているので、右手でホルスターのピストルを抜いて怯ませ、顔面を盾で殴り飛ばした。

ふとマシユを見ると、ボクの後ろを眺めていた。そのマシユの後ろから敵が来ている。それだけで挟み撃ちされてるのをお互いに察し、マシユは盾の先端で姿勢を低くしながらボクの後ろに突きを入れ、ボクは盾を地面に突き刺し、身体を思いつきりに振り上げて上から踵落としをお見舞いした。

ザツと辺りを見回し、残りは5体。右手のピストルをリロードしていると、マシユがボクの肩に手を置いて引き込みながら、横に回転しながら盾を振り回した。ボクの後ろの竜牙兵に盾による殴打を二発直撃させた。

「気を抜かない」

「ごめんね」

謝りながら、右から来た攻撃を盾で受け止めてピストルをぶつ放して怯ませると、武器を持つ竜牙兵の右手を蹴り飛ばした。ピストルをホルスターに引っ込め、宙に舞う剣を掴んで竜牙兵に振り下ろした。

お、これは伝説のあの技ができるのでは？そう思い、剣を構えると二人に叫んだ。

「マシユ、マスタァー！しゃがんで！」

「えっ？」

言われるがまま二人がしゃがんだ直後、剣と盾を360°に力付くで振り回した。残りの竜牙兵三体に直撃し、バギバギバギッと鈍い音を立てて粉碎した。

辺りを見回すと、竜牙兵の群れは粗方片付いていた。ようやく気が抜ける、そう思つて剣を地面に突き刺して一息ついた。

「……………ふう」

「ふう、じゃありません！危ないじゃないですか!?!?」

マシユがボクの胸ぐらを掴んで来た。

「私は盾を持つてるからまだしも、もしマスターの反応が遅れたらどうするつもりだったんですか!?!?」

「ま、まあまあ。勝てたんだし良いじゃん」

「良くありません!」

「お、落ち着いてよマシユ。私なら大丈夫だから」

マスターがそう言うのと、マシユは渋々手を引つ込めた。

すると、横から聞き覚えのある声が割り込んで来た。

「二人とも息ぴつたりだねえ」

全部片付けて来たアストルフオが、少し感心したように言った。

「本当にサーヴァントになりたて?」

「まあ、マロとはいつも一緒にいますから」

「ね、考えが分かるよね何となく。サーヴァントになつて身体能力も上がつて、なんか

……こう、やりたい動きつてのも出来るようになったし」

空中で半回転して跳び回し蹴りなんて普通の人には出来ないからね。

そんな話をしてる時だ。兵士達から「来たぞ！」と声が上がった。ふと振り向くと、ドラゴンの群れが飛んで来た。

「……………は？何あれ」

「ドラゴン、だね」

「いえ、正しくはワイバーンです」

「なんであんなものが……」

間違いない、こんな時代にドラゴンがいるわけがない。いや、竜牙兵の時点で間違ってるけどね。

「あらー……どうすんのあれ？」

「ボクに任せてよ」

アストルフオはそう言うのと、剣を鞘に収めて詠唱し始めた。

「キミの真の力を見せてみる！『この世ならざる幻馬』！」

直後、何処からか鷲の頭と翼にライオンの身体の化け物、ヒポグリフが姿を現した。そういえば、この子ライダーだったな。

「すげー……」

「でしよでしよ?すごいでしよ?じゃあ、ボクはちよつと行ってくるから、二人はマスタ―を守ってて」

そう言いながら、ヒポグリフに跨るアストルフオ。マシユは仕方なさそうに引き下がったが、ボクはそうはいかなかった。

「待った、ボクも行くよ」

「えー、ヒポグリフ重たいから嫌だと思うよ」

「いやいや!ボク軽いからね?!?……マシユと違って余計な所に脂肪いかなかったし」

いや、まだ諦めてないけど。まだ十代だからね。まだ成長期はあるはず。

「アストルフオ一人じゃキツイでしよあの量は」

「それでも無いよ?すぐ終わらせるから」

「いやいや!他の人への被害もあるしボクも乗った方が良いつて!」

「変に食い下がってくるなあ……。もしかして乗りたいの?」

「……………」

そうとも言う。そんな答えが表情に出ていたのか、アストルフオはニマーツと意地悪そうな笑みを浮かべた。

「じゃあ、乗せてあげたら何してくれる?」

「こ、交換条件?!?それはズルいんじゃないの?!?」

「関係ないもーん。ねえ、何してくれるの?」

「くくくツ! マスター!」

「いや、どっちでも良いから早くして。もう兵隊さん達は襲われ始めてるし」

グツ……! 意外とドライだな、立花は。仕方ないので、交換条件を飲むことにした。

「分かったよ。後でなんでも一つ言うこと聞いてあげるから……」

「言ったなー? よし、許可しよう」

覚えてろよチクシヨウ。内心悔やみながら、マシユにボクの盾を渡した。

「はい、これ持ってて」

「へっ? マロはどうするのですか?」

「剣とピストルがあるから平気。地上にいられるわけじゃないから、いざという時のために持っててよ」

「わ、分かりました」

「わ、分かりました」

地面に突き刺しておいた竜牙兵の剣を抜いて、ヒポグリフの上に跨った。ふわあ……

フカフカしてる……心地良い……寝ちやいそう……。

「よし、行くうー!」

直後、ヒポグリフは飛び上がった。一頭目のドラゴンに向かい、早速と言う感じで突

撃。

「ちよつ、はつ、早くない!?？」

「まず一匹目！」

「待つて待つて待つて！」

手に持つていた剣を投げ捨てて、アストルフォの腰にしがみついた。は、速い！思つてたより全然！泣きそう！何これ、どういふことなのこれ!?？」

ただただ、涙目でアストルフォの腰にしがみついてること数分後、「マロ、マロ？」と声が掛かった。

ふと顔を上げると、アストルフォが少し照れたような表情でボクを見下ろしていた。

「……さ、流星にそこまでくつつかれると照れるなーつて……」

「へっ?！」

「も、もう終わったから離れてくれると嬉しいんだけど……」

「つ、ご、ごめんねっ」

慌てて離れて、ヒポグリフから降りた。ふう、いくら女の子同士でもあまりくつつくのは良くないよね。

あー、怖かった。にしても怖かった。寿命が10年縮んだよ。今だに早鐘のごとく鳴り響く鼓動を抑えてると、マシユがボクの肩を掴んだ。

「ただいまー……つて、どうしたの?！」

「マロ、さつき持ってた剣はどうしました？」

「へっ？あー、いつの間にかどっか行っちゃったね」

「アレを見なさい」

「？」

マシユの指差す先を見ると、脚を開いて座り込んでるマスターの脚の間に突き刺さっていた。

……あれ、もしかして途中で手放したのがマスターに紙一重で刺さりそうになった感じ？

「……………」

「マロ、今日は晩御飯抜きです」

「すみませんでした！」

ていうかマスターは大丈夫なの？なんか白目剥いてるように見えるけど。

そんな話をしてる時だ。兵士達の方から大声が聞こえた。

「逃げろ！竜の魔女が出たぞ！」

竜の魔女？何それ？

「今回の特異点の原因と思われる方です。処刑されたはずの彼女は蘇り、先ほどの怪物たちを呼び出してそうですよ」

ボクの考えてることを見透かしてか、マシユが説明してくれた。

「ですが、聞いていた感じの少し違うのが気になりますね……」

すると、兵士達に怯えられている金髪の女性はボク達の方に歩み寄って来た。魔女、と言うのなら交戦の可能性もある。ボクは盾を構えつつ、ホルスターのピストルに手を掛けてマスターを庇えるように退がった。

アストルフオも同じように腰の鞘に収まつてる剣をいつでも抜けるように手を掛けて、マシユの横に移動した。

金髪の女性は、マシユの前に立つと頭を下げた。

「あの、ありがとうございます」

「……………はっ?」

ボクから声が漏れた。急にお礼? どういうわけ?

二人の会話に耳を傾けてるときだ。後ろから起き上がったマスターがボクの首を締め上げた。

「マロー! よくもやってくれたなあ! 死にかけてたっつーの!?」

「ぐえっ……………! い、いまはそんなばあいじゃ……………!」

「ごめんなさいは!?」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい!」

締まってる締まってる！死ぬっつーの！ボク、肺活量そんな多くないんだから………！

「次やったら『私は貧乳です』って看板を首から下げさせるからね」

「……………自分も大差ない癖に」

「何か言った？」

「ぐええ！ごめんなさいなんでもないです！」

そんなバカやっていると、マシユとアストルフオと金髪の女の人が歩いて来た。

「先輩、こちらサーヴァント・ルーラー、ジャンヌダルクさんです」

「ちよつと待ってね。こいつ今やつつけるか……………今なんて？」

手の力が緩んだ隙に、ボクは咳き込みながら抜け出した。ジャンヌダルクって、竜の

魔女になったとかいう……………？

「とりあえず、付いて来てもらえませんか？詳しい話はそれからします」

言われて、ボクがむせてる間について行くことになり、皆から離れる事にした。